

# 志賀直哉の『菰野』

短編小説の神様と称された志賀直哉（1883～1971）は、大正14年（1925）4月、短編集『雨蛙』（改造社）を出版して、京都市から奈良市幸町に転居した。続いて昭和4年（1929）4月、奈良市上高畑に住居を新築して移転し、12年間をそこで暮らした。

新居に移ったものの、その年から約5年間は、巨匠といえども創作ゼロの状態が続いていた。創作再開後の第1作ともいえる短編『日記帳』は、昭和9年（1934）『改造』4月号に発表され、後に『菰野』と改題された。この頃から、直哉の作品に仮構や潤色が全くといってよいほどなくなっていく点で、来湯して執筆した『菰野』は大きな意義があった。

関西線で奈良から生母銀の郷里亀山を過ぎて、「四日市で降り、湯の山行きの小さい電車（三重交通湯の山線）に乗り換えた」直哉は、『菰野』の中でつぎのように簡潔で見事な沿線描写をしている。

ある停車場で、待合室や改札口や、いかにもそれらしい構えをしながら驛員のいるところが普通の畳敷きで、女房や子供が普通に住んでいるのを見た。低い土手を囲らした屋敷跡が、何となく様子が變っているので注意を惹いたが、それは一万石の菰野城址だった。

終点の湯の山驛から溪流について山路を自動車で行った。間もなく不意に思い切った驟雨が来た。ずぶ濡れの幌自動車は山峡の狭い夜路を右に左に梶を曲げながら急いだ。自動車のヘッドライトが水を撒いているように見えた。

自動車が止まったところから旅館までさらに徒歩で登り、すっかり汗になりながらようやく着く。

隣の部屋を望み、別館と言う方の小さな座敷に通されたが、落ち着いて書き物をするにはよさそうな部屋だった。

湯の山の旅館で一番古い二軒の宿のうちの一軒、寿亭の別館「松仙閣」の一室のことである。その6畳の間で、義弟のことなどをまとめようと原稿用紙を前にする直哉であった。直哉と女主人葛谷ひさの相對する場面は作中では最もさわやかな描写であり、湯の山の夏の朝の素晴らしさでもある。

昭和5年（1930）当時の寿亭には、別館として松仙閣、対山閣、望城閣、南別館があり、庭園寿楽荘内には高等別館である「水雲閣」があった。そこへも女主人ひさは直哉を案内している。

志賀直哉の泊まった「松仙閣」は近年、従業員の宿舎になって久しい。昭和28年（1953）に俳人山口誓子が随筆「湯の山の宿」「松仙閣六号室」を書いており、前者には「直哉がその小説を書いた旅館を見たくて行った」とある。誓子もそこに泊まり、

山が寒月直哉の部屋に吾を泊め  
の一句を詠っている。